

GLA 随想 6 法華經に基づく伝道

GLA を憂う元会員

2013年4月19日 第1版

目次

1	はじめに	1
2	GLA と法華経の関係	2
2.1	一乗の法について	2
2.2	三車火宅（さんしゃかたく）の喩について	4
2.3	長者窮子（ちょうじゃぐうじ）の喩	5
2.4	法華七喩：三草二木（さんそうにもく）の喩について	6
2.5	多宝如来について	6
3	今後必要と思われること	8
3.1	基礎研究の充実	8
3.2	プロジェクトの発足／リーダーの選任	8

1 はじめに

これまで発表させて頂いたレポート GLA 随想 1～5 は、「グループ力・響働力に基づくお世話構造」および「7つのプログラム」に関するものであり、これらは何れも高橋佳子先生から明確にご指示を頂いたテーマと言えるのではないかと思います。

私は、先生がご指示下さったテーマ以外にも、GLA の未来について若干のヴィジョンを描いていますが、それらについて現時点で実現を呼びかけさせて頂くかどうかは迷う点があります。それは、原則的には先生からご指示頂いたテーマを優先して遂行すべきであり、他のテーマについては、ご指示頂いたテーマについて少なくとも完成の目処が立ってから着手すべきではないかと思われるためです。

しかし、スタートした後には実現までに時間を要するテーマについては、できるだけ早い段階で準備を進めて頂くことも必要ではないかと思われます。本レポートで報告させて頂く「法華経に基づく伝道」は、いざ始めようとするとなかなか時間がかかるテーマですので、早い時期に準備に着手して頂くことが望ましいのではないかと思います、準備を呼びかけさせて頂くことにしました。

「法華経に基づく伝道」とは、一言で申しますと、GLA と法華経の関係を証すことによって「GLA は法華経の理想を実現する団体である」ということを、何百万人もの法華経信仰者に向かって発信するという事です。

学術的な研究によれば、「法華経は釈尊の説いたものではなく、後世の人の作によるものである」という見解が主流になっています。信次先生も「心の原点」(p34-35)などで法華経について記述されていますが、少なくとも釈尊が説かれたこととは相当に違っているようです。しかし、天台智顛は数ある経典の中から法華経を最重要の経典として位置づけており、日本においても、様々な教団において信仰の対象になっています。

法華経は、誰が、いつ説いたものであるのかは解りません。しかし、天上界の啓示を受けた誰かが二十世紀の日本に出現する高橋佳子先生および GLA を比喩によって予言したものではないかと私は考えています。

2 GLA と法華経の関係

2.1 一乗の法について

法華経には、「一乗」という思想が述べられています。これは、誰もが仏性を抱き、仏になることができる、とする思想です。これに対立する思想として、「三乗」という思想があります。「三乗」とは、声聞、縁覚、菩薩の三つの乗り物があり、各人に能力の差があるように、仏になれる人となれない人がある、という思想です（「明智の源流へ」 p39）。

「一乗」ということを単なる思想として述べることは困難なことではありませんが、誰もが悟りを開いてゆける教えである「一乗の法」を実際に説くことは至難の業ではないでしょうか。私は、高橋佳子先生が、正にこの「一乗の法」を説かれている方であると気づかせて頂きました。過去、先生は、「一握りの覚者のみが悟りを開ける時代から、市井の平凡な一人一人が悟りを開ける時代へ転換を果たしてゆく」という事を仰ったことがありました。それを具体的に果たしてゆく教えこそ、「一乗の法」ではないでしょうか。

「一乗の法」ということについて、実例を挙げて説明します。道元禅師の正法眼蔵にある「山水経」の冒頭部分では、このような一節があります。

「而今の山水は古仏の道現成なりともに法位に住して、究盡の功徳を成ぜり」（私達が今目にしている山や川などの自然の姿は、そのまま永遠の神理を体現している。なぜなら、それらはともに仏法世界のあり方に徹しているからである）

しかし、「山」や「川」などの自然の姿が、なぜ永遠の神理を体現しているのか、あるいはなぜ仏法世界のあり方に徹しているのか、山水経を読んで理解する事は、なかなか難しいことではないでしょうか。

道元禅師は一切衆生の救済を切望されていました。また、正法眼蔵の中では、法華経を非常に賞賛しておられるということです。しかし、山水経にも見られますように正法眼蔵の内容は難解であり、法華経に謳われている「一乗の法」には程遠い感があります。これは、仏教の神髄を誰にでも解るように説く

ことは極めて困難なことであり、道元禅師にしても、それは適わなかったのではないのでしょうか。

一方、高橋佳子先生の「12の菩提心」ではいかがでしょうか。「山」や「川」などの自然の姿がなぜ永遠の神理を体現しているのか、誰にでも解るように説かれています。私は、「一乗の法」とは次の二つの条件を満たす法であると考えます。

- ・ 誰にでも理解でき実践できる容易さを備えていること
- ・ 菩薩を育み如来に至らしめるだけの奥深さがあること

「法華経」とは、仏教界ではそれ自体が「一乗の法」と言われており、法華経にもそのように記述されていますが、誰にでも理解でき実践できるものではない点で、「法華経」そのものは「一乗の法」ではないものと考えます。

古くから法華経に失望し、その価値を否定した人は何人もいました。白隠禅師は16歳のとき、初めて法華経を読んで、『この経に功德があるなら謡曲や講談本にも功德があるだろう』と酷評しました。しかし、42歳のとき法華経の意味を悟り号泣しました。白隠禅師ほどの方でも、法華経の意味を悟るまでに26年の修行が必要であったということは、大多数の人にとって法華経の意味を悟ることは難しいということになります。

法華経は「一乗の法とは如何に素晴らしいものであるか」という事を比喻によって示したものであると考えます。それゆえ、法華経は映画で言えば「予告編」と言えるのではないのでしょうか。私達は映画の「本編」を見せて頂いたから、「予告編」が「予告編」であるということがはっきりと解るのではないのでしょうか。「一乗の法」を説くという事は、非常に難しいことであり、真に「一乗の法」を説かれた方は、有史以来、高橋佳子先生が初めてであったと考えます。

2.2 三車火宅（さんしゃかたく）の喩について

法華経の中には、様々な「喩」が含まれていますが、その中の代表的な七つの喩（法華七喩）のうち、^{さんしゃかたく}三車火宅の喩について検討します。

■ **法華経の内容** ある所に、沢山の子供達を持った長者が住んでいました。ある日、その家に火事が起こってしまいました。しかし、家が燃えているのに、子供達は火事には気づかず、家の中で嬉々として遊んでいました。長者は、子供達に避難するように言いますが、子供達は遊びに夢中で聞く耳を持ちません。そこで長者は、子供達が以前から欲しがっていたものを思い出し、子供達に向って語りかけました。「さあ、外に出れば珍しいおもちゃをあげるよ。羊の車、鹿の車、牛の車だよ」これを聞いた子供達は、我先に外に飛び出しました。しかし、門の外には、約束の物はありませんでした。子供達が約束の物を要求すると、長者は白い牛の車の牽く絢爛豪華な大白牛車を夫々の子らに与えました。すると、子供達は全員が満足しました。

■ **GLA との関係** 個々の人々が願っておられること、あるいは抱えておられるテーマには、様々な違いがあります。例えば、「家族との関係が振れているので修復したい」、「自分の会社の経営が思わしくないので、経営改善したい」、「子供の登校拒否を解決したい」など様々です。これは、三車火宅の喩では、羊車、鹿車、牛車を欲しがっている子供たちに該当するのではないのでしょうか。

それに対して先生は、「煩惱地図」、「菩提心発掘」、「ウィズダム」、「止観シート」など、誰に対しても同じものを与えて下さっています。これは、「同じ」ということにとどまらず、「魂の成長を伴ってテーマが解決される」という点で、個々の人々が願っていることよりも、はるかに価値の高いものです。これは、三車火宅の喩では「大白牛車」に相当するのではないのでしょうか。

「随想4」のレポートでは、「研鑽の充実」として「テーマ別研修」、「社会発信力の強化」として「テーマ別御指導・如是我聞集」をホームページ上で公開することを提案させて頂きました。これらのご提案は、「三車火宅の喩」に秘められている智慧、すなわち「まず相手が望むものを提示する」という理念に適うものであると考えます。

2.3 長者窮子（ちょうじゃぐうじ）の喩

次に、同じく法華七喩の中にある長者窮子ちょうじゃぐうじの喩について検討します。

■法華経の内容 ある長者の息子が幼い時に家出した。彼は50年の間、他国を流浪して困窮したあげく、父の邸宅とは知らず門前にたどりついた。父親は偶然見たその窮子が息子だと確信し、召使いに連れてくるよう命じたが、何も知らない息子は捕まえられるのが嫌で逃げてしまう。長者は一計を案じ、召使いにみすぼらしい格好をさせて「いい仕事があるから一緒にやらないか」と誘うよう命じ、ついに邸宅に連れ戻した。そしてその窮子を掃除夫として雇い、最初に一番汚い仕事を任せた。長者自身も立派な着物を脱いで身なりを低くして窮子と共に汗を流した。窮子である息子も熱心に仕事をこなした。時が過ぎ、臨終を前にした長者は、窮子に財産の管理を命じるようになった。窮子は管理者になるが、少しの野心も欲望も起こさず、粗末な小屋で不満なく生活していた。長者は、臨終のとき、枕元に窮子と土地の有力者を集め、その席で窮子が実の子であることを明かし、財産を全て窮子に与える旨を宣言した。

■GLA との関係 長者窮子の喩は、「低い理想」（よい賃金がもらえれば、それでよい）で満足している窮子に対して、本人が望んでもおらず、考えてもいないような「高い理想」（全財産の相続を受ける）が実現するというお話です。

上述しましたように、GLA では個々の人々が願っておられることは、例えば、「家族との関係が捩れているので修復したい」、「自分の会社の経営が思わしくないので、経営改善したい」、「子供の登校拒否を解決したい」などです。これらは、「低い理想」に喩えられているのではないのでしょうか。

GLA では、このような「低い理想」を実現するために研鑽を続けていると、本人が望んでもおらず、考えてもいないような「高い理想」が実現するのではないのでしょうか。それは、「真我誕生」であり、また「転生の四つのテーマの成就」とも言えます。

2.4 法華七喩：三草二木（さんそうにもく）の喩について

次に、同じく法華七喩の中にある^{さんそうにもく}三草二木の喩について検討します。

■ **法華経の内容** 大地に生える草木は、それぞれの種類が異なり大小の違いもある。大雲が起り雨が降り注がれると、それぞれの草木は自分の分に応じた量の水を吸収し、それぞれが平等に潤い、異なる形に成長することができる。

■ **GLA との関係** 魂の成長の度合いや個性というものは、一人一人異なっています。しかし、GLA では、どの人も、共通の神理すなわち一乗の法を学び実践することによって魂のさらなる成長を果たしてゆくことができます。そして、その事は、一人一人異なる魂の個性が開花してゆく道程でもあるということになります。

2.5 多宝如来について

■ **法華経内の記述** 多宝如来は、過去仏（釈尊以前に悟りを開いた無数の仏）の一人である。釈尊が法華経の説法をしていたところ、地中から七宝で飾られた巨大な宝塔が出現し、空中に浮かんだ。空中の宝塔の中からは「すばらしい。釈尊よ。あなたの説く法は真実である」と、釈尊の説法を称える大音声がかつ響いた。その声の主は、多宝如来であった。多宝如来は自分の座を半分空けて釈尊に隣へ坐るよう促した。釈尊は、宝塔内に入り、多宝如来とともに坐し、説法を続けた。過去に東方宝浄国にて法華経の教えによって悟りを開いた多宝如来は「十方世界（世界のどこにでも）に法華経を説く者があれば、自分が宝塔とともに出現し、その正しさを証明しよう」という誓願を立てていたのであった。

■ **GLA との関係** 「地中から七宝で飾られた巨大な宝塔が出現し、空中に浮かんだ」という多宝如来の登場シーンは、「我は七色の翼を持つ天使なり。地より沸き出でて天へ帰らん」というお言葉と符合するように思われます。「多宝如来」は高橋佳子先生を示唆するものであり、「七宝で飾られた巨大な宝塔」とは GLA を示唆するものではないでしょうか。

天上界の高次の世界には、「法華経のアイデア」とも呼ぶべきものが存在するものと考えます。しかし、アイデアそのものは不立文字であり、その内容を直接的に説明することは困難であるため、法華経の作者に対して、天上界から「比喩」という形でアイデアが開示されたのではないのでしょうか。

一方、高橋佳子先生は、法華経のアイデアを現実世界に具現する力を持たれており、その結果が今日の **GLA** ではないのでしょうか。古来より、法華経に対する評価は人によってはっきりと分かれていました。法華経を高く評価した人々と、「下らないもの」と評価した人々がいました。法華経を高く評価した人々は、法華経の背景にあるアイデアの存在を感じることができ、そのアイデアを高く評価されたのではないのでしょうか。そして、この「法華経のアイデア」こそ、「スーパーレリジョンのアイデア」そして「**GLA** のアイデア」に等しいのではないのでしょうか。

現代の日本では法華経信仰が盛んですが、その日本に **GLA** が誕生したという事は、「十方世界に法華経を説く者があれば、自分が宝塔とともに出現し、その正しさを証明しよう」という誓願を成就するという意味もあったのではないかと思います。

3 今後必要と思われること

3.1 基礎研究の充実

前節では、法華經について気付きましたことを列挙しましたが、実は私は法華經についてほとんど知識がなく、簡単な入門書を一冊読んだに過ぎません。

「法華經に基づく伝道」とは、具体的には「GLA と法華經の関係を証した書籍を発刊する」という形で結ばれてゆくのではないかと思います。書籍のストラクチャーを検討する前に、法華經そのものについてさらに詳しい研究を重ねてゆく必要があるのではないのでしょうか。

世間には、法華經についての解説書が多数発刊されていますが、「GLA の出現を預言する書」という観点から法華經を解説した書籍は全く存在しないはずです。そうしますと、現存する解説書はほとんど参考にならず、法華經全般について、その意味するところを一から探求してゆくことになるのではないのでしょうか。

それを果たしてゆくことは大変に時間のかかることですから、法華經に詳しい有志の皆様には、連絡を取り合ってくださいながら、ぜひ研究を進めて頂きたいと思います。

3.2 プロジェクトの発足／リーダーの選任

ある程度、法華經の基礎研究が進みますと、「法華經に基づく伝道」のプロジェクトチームを発足させ、伝道の具体的なビジョンを描いて実践してゆくことが必要になります。

ここで、プロジェクトのリーダーをどなたに担って頂くかが問題になりますが、関芳郎総合本部長に担って頂くことが呼びかけられているのではないかと思います。その理由は、かつて信次先生が、関本部長に対して、「どうか、佳子の事を証して下さい」と仰った事によるものです。この事から、関本部長は「高橋佳子先生をお証しする」という使命を背負っておられる事が明らかではないのでしょうか。

この使命を果たされるためだと思われませんが、以前に関本部長が「イザヤ

書」や「如来の十力」などを引用して、高橋佳子先生がメシヤであられることを説明されたことがありました。しかし、「イザヤ書」や「如来の十力」ではなく、「法華経」に基づいて先生をお証しする事が正しい方法であると考えております。その使命を果たして頂くためには、プロジェクトのリーダーを関本部長に担って頂くこと以外に考えられないのではないのでしょうか。

プロジェクトのリーダーを担って頂くためには、何よりも「法華経のアイデア」と「GLA のアイデア」が等しいということを感じ取ることができなければなりません。その力を関本部長が育てておられるのかどうかよく解らない点がありますが、会員の皆様が押し上げる力を結集して「7つのプログラム」および「法華経の基礎研究」を進めてゆかれるならば、おそらく道が付いてゆくのではないかと考えています。

以上